

東洋史研究

第七十八卷 第二號 令和元年九月發行

「遺骸思葬」——『夷堅志』における埋骨の物語——

鄭

滄

はじめに

第一章 『夷堅志』における骸骨と幽霊

1 幽霊は骸骨に依存する

2 骸骨の完全性

3 骸骨と幽霊の蘇生

第二章 骸骨を埋葬する

1 骸骨の埋葬冀求

2 宋人の埋葬重視

3 骸骨が寺院に放置される

結び

はじめに

洪邁、字は景廬、號は野處と容齋、諡は文敏、饒州鄱陽の人で、北宋の徽宗宣和五年（一一二三）に秀州で生まれ、南宋高宗の紹興十五年（一一四五）に博學宏詞科に及第し、寧宗嘉泰二年（一一〇二）に鄱陽に歿した。洪邁は高宗・孝宗・光宗・寧宗の四朝に仕えたが、官途に在っては終始政局に翻弄された。洪邁の著作で最も著名なものは『容齋隨筆』と『夷堅志』である。『夷堅志』の名は、『列子』湯問篇の「大禹は行つて見、伯益は知つて名附け、夷堅は聞いて書く」⁽¹⁾に由来する。『直齋書錄解題』に「『夷堅志』、甲志から癸志までは二百卷であり、支甲から支癸までは一百卷であり、三甲から三癸までは一百卷であり、四甲と四乙は二十卷であり、大凡四百二十卷である」⁽²⁾とあるように、『夷堅志』は個人が撰した志怪小説の中で最も大部なものであり、その分量は『太平廣記』に比肩する。ただ惜しいことに、數百年を経て『夷堅志』の大部分がすでに散逸している。本稿は涵芬樓印本及び『永樂大典』などから集輯した二十六の佚文を加えた、現在最も整っている中華書局の一九八一年標點本を底本として、現存する小説のみを研究対象とする。なお、甲志・乙志の翻譯には汲古書院から出版された譯注をもとにして、一部改變を加えた。⁽³⁾

さて、『夷堅甲志』卷十七に「解三娘」という物語がある。

興州の後軍統領である趙豐は、紹興二十七年（一一五七）の春、安撫使の命によって各地の軍隊を巡察した。果州に来て、南充驛に泊まった時、役人に命じて長椅子を母屋に置かせた。驛の役人が進み出て、「この部屋には物の怪が出て、夜になると必ず泣き聲が聞こえます。いつもお客様がこちらにいらつしゃると、大抵は（この部屋を）避けて使わず、母屋の西側の部屋にお泊まりになるのです」と告げた。豐は笑って「私が幽霊を怖がるものか」と答え、結局母屋で寝た。夜になると、泣き聲が外から聞こえてきて、何者かがまっすぐ寝ている部屋へ向かって来るようだった。豐が「お前は何か冤罪を訴えようとしているのか。言えば、私がお前のために冤罪を晴らしてやるう。言わない

なら、速やかに立ち去れ」と言うのと、果たして行つてしまつた。しばらくすると再びやつて來た。従者たちはみな靴の音がコツコツと響くのを聞いた。次の日に、(豊がこのことを) 知州の王中孚(諱は弗)に話すと、王はでたらめだと言つた。豊はその日の夕方に州の宴に出かけて、夜歸つて來ると、酔いで氣分が高揚し、まだ寝ることができず、胡牀に腰を下ろして休んでいた。すると、一人の女が髪を振り亂して前に立ち、「私は解通判の娘の三娘と申します。名は蓮奴といい、元は中原の人間です。兵亂のため蜀に逃れた時、都大提舉陝西茶馬司である戸部の李恣の家で奴婢となり、實際この屋敷に住んでいたのです。李には娘がおり、知州の馬大夫の子紹京に嫁がせましたが、私を付き添いの侍女にしました。不幸にも容姿の美しさから馬さんに愛されたので、李氏が父に告げて、私を杖で打ち殺させたのです。息がまだ絶えていないうちに、すぐに大きな穴を掘るよう命じて、私の死體を逆さまにして穴に埋め、今年で三十年になります。どうか將軍には私を哀れと思し召して、生まれ變わらせて下さいまし」と言つた。豊が「お前は亡くなつてから久しく、士大夫たちも日々ここを訪れていたのに、どうしても早くに自らの正しさを申し述べなかつたのか」と尋ねると、女は「死體を葬りたいという思いは、一時も忘れたことはございませんが、ここには神様がいて守護しておられ、何度も出ることは許されなかつたのです。十年前に私が夜に泣きながら訴え出ますと、土地神様は『いづれ趙將軍がここにおいでになるから、それがお前の恨みを晴らす時である。』と告げられました。將軍のおいでを日夜待ち望んでおりましたので、思い切つてお願い申し上げます」と答えた。豊が「果たしてそうであるなら、私はお前のために考えてやらねばなるまい」と言うと、女は禮を述べて立ち去つた。(豊が)部下に跡をつけさせると、母屋の外の垣根の下に來たところで姿を消した。次の日、豊は僧を招き讀經して濟度を行うと出發した。夜に潼川路の東關縣に着き、縣の驛で宿泊した。女が再び前に立つたが、すでに髪を束ねて高いまげにしていた。豊が「私はお前のために法事を行つてやつたのに、どうして私を追つて來たのだ」と尋ねると、「將軍のご恩は、もちろん大變ありがたいものでした。ですが(私の)白骨はまだ母屋の外の垣根の下にあり、將軍でなければ誰

が私のために死體を掘り出してくれるでしょうか」と答えた。豊が「私は旅の身で、しかもすでにそこを離れているのに、どうしてお前のために力になってやれるだろうか。知州の王郎中に訴えてみてはどうか」と言うと、「それはわかっておりますが、お役所の門には神様がおられるので、どうしてみだりに入ることができませんか。とは言え私の恨みごとは王郎中でなければ解決できません。將軍が私のためにお口添え下さるのでなければ、どうやって王郎中に私の思いを伝えられるでしょうか。私の骨が掘り出されなければ、私は生まれ変わることもできません。私の骨が掘り出されて生まれ変わるかどうかは、將軍のお口添えの一言に懸かっているのです」と答えた。趙は再びこれを承諾し、それからこの話を手紙にしたためて使者に知州の王に伝えさせた。王はそこで昔李戸部が使っていた兵士を捜すと、たった一人譚詠だけが健在だった。詠に女の骨を捜すことを委ねると、詠は十數人の兵士を引き連れて垣根のところに来て、土を掘り返して骨を捜した。丸二日かけたが、骨の在處は杳としてわからなかった。詠は一人の巫女を呼んで骨の在處を尋ねた。巫女は自ら聖婆と稱し、幽靈の言葉をお口に託して、詠を呼んで「お前はあの時その手で私を埋めておきながら、本當に場所を忘れたのか。今土を掘り返しているところは正しいが、まだ浅い。私を逆さまに埋めた時、木の寢臺をかぶせたが、その木がまだ残っている。もし木が見つかったら、骨はすぐそこにある。頭の骨が一番下にあるから、是が非でも私のためにそれを取り出しておくれ。私は頭の骨が無いと、生まれ変わることもできないのだから」と責めた。詠は驚き恐れて罪を詫びた。その翌日、果たして死體が見つかった。州は女のために高原に埋葬し直した。當時紹京は渠州鄰水縣の尉で、間もなく、普州の推官に任命された。解三娘が来て當時の話をすると、紹京もすぐに亡くなった。關壽卿（諱は耆孫）が教官として赴任した際に南充驛に宿泊し、解三娘の傳記を書いた。虞井甫が知渠州だった時、紹京はちょうど（鄰水縣の）尉であったという。

解三娘の物語の内容は非常に豊富で、議論すべき事柄を多く含んでいるが、ここでは骸骨の埋葬に注目して論じたい。理不盡に殺害された解三娘が死後幽霊となって望んだのは、自分の骸骨が適切に埋葬されることだけで、それが轉生の

条件であると彼女は考えていた。ここから二つの問題が考えられる。第一に、幽霊にとって骸骨が持つ意味である。解三娘の幽霊は自分の骸骨の周辺を徘徊していた。つまり、幽霊は骸骨と結びついていたのである。第二に、埋葬の問題である。解三娘の骸骨は粗略ながらも一應の處置がされたが、彼女は適切に埋葬されることを求めた。正式に埋葬されてこそ、彼女は轉生できるのである。

志怪小説である『夷堅志』の研究は、當初文學領域に集中していた。そして、テクストに關する研究は主に成書・版本、洪邁の小説觀及び明清小説への影響を論じてきた。しかし近年、『夷堅志』の史料價値が次第に重視されるようになり、歴史學的な研究も積極的に展開されつつある。『夷堅志』の内容は豊富で、その研究の範圍も非常に廣い。社會史から文化史・經濟史・政治史に至るまで様々な分野に關する史料を見つけることができる。

しかし、物語の多くは神仙鬼怪など超自然の要素と關係するので、研究も多かれ少なかれ神鬼に關わらざるを得ない。研究が多岐に亘るため、⁽⁵⁾改めて一々紹介はしないが、本稿と關聯するのは臺灣の盧秀滿の『冥法・敢樞・鬼崇・齋醮——夷堅志之幽鬼世界』（萬卷樓、二〇一三年）である。盧氏は鬼怪と關聯する部分を全體的に敘述しているが、なお検討の餘地がある。盧氏は幽霊の徘徊の問題を取り上げ、埋葬が幽霊にとつて重要であることを指摘し、特に両親を埋葬しないことへの悪報に注目するが、埋葬の問題はこうした孝の問題を越えた射程を持つている。また、氏は幽霊が亡くなった場所を徘徊していると考えてこれを「地縁縛靈」と名付けているが、これにも承服できない。幽霊は場所よりもむしろ骸骨の周圍を徘徊しているというべきであり、これが本稿で幽霊と骸骨の關係を考えるうえでの要點となる。

宋代の喪葬については、火葬の問題や柩の寺院への寄置といった問題も存在するが、⁽⁶⁾これらを骸骨と關わらせた研究は管見の限り見當たらない。冒頭に掲げた「解三娘」の物語は、『夷堅志』の骸骨埋葬談の代表的なものである。本稿は解三娘が自らの骸骨の埋葬を懇請するというプロットを切り口として、幽霊と骸骨の關係及び骸骨の埋葬の意味を考究する。

第一章 『夷堅志』における骸骨と幽霊

1 幽霊は骸骨に依存する

(1) 骸骨の周りを徘徊する

解三娘の幽霊は死後三十年間ずっと南充驛の母屋を徘徊していた。それは、彼女の骸骨が母屋の外の垣の下にあったことと深い関係がある。つまり、彼女の幽霊は骸骨から離れられない、或いは離れたくないのである。幽霊は何かに依らなければ、「孤魂野鬼」になってしまうが、骸骨がその主な據り所となるのである。支景志卷第九の「王縣尉小箱」は當時の人々のそうした認識を示している。呂叔炤が同僚の王生に頼まれて保管していた箱はしばしばひとりで動いた。數箇月後、王生が歸つて、ようやく箱のことを説明した。

町にいた時、ある娼妓とねんごろになった。間もなく娼妓が死んだので、自ら埋葬の場所へ行つて、その棺を燃やして、骨灰を包んで小箱に置いた。箱の中にあるのはこれである。⁷¹

この物語は呂叔炤が洪邁に自ら話して聞かせたものである。娼妓の幽霊は骸骨に依存していて、それが箱の中で動いたという話になっている。結局、娼妓の遺灰は川に撒かれたが、呂はこの「娼鬼」の話を思い出してぞつとしている。しかし、彼の見方は獨特と言うわけではなく、宋人の意識の中で骸骨と幽霊はつながっていた。幽霊は骸骨に依存しており、骸骨を失えば幽霊も歸る場所を失ってしまう。

丙志卷第十九の「餅家小紅」は骸骨が壊された話である。

私は□公が建てた住宅の土中の人で、名前は小紅といい、西の門のところに住んでいました。姉妹二人で、私の父は餅家です。不幸にも繼母の行いが悪く私を虐待しました。私たち二人は耐えられず自殺しました。不幸は重なり、朽

ちた骸骨はあなた様の部下に壊されました。墓穴の中の物には一萬錢の價値がありますが、劉老翁がすべて取りました。私は歸る場所がなく、今はただ窓外の胡桃の木の下で、あなた様の家に寄りかかって住んでおり、出てゆくことができませぬ⁽⁸⁾。

小紅の骨が壊され、彼女の幽霊は「重不幸」・「無所歸」と語った。ここから、骸骨は幽霊のよりどころであることが分かる。それがない小紅は樹下に身を寄せざるを得なかった。骸骨の喪失は幽霊にとつて深刻な打撃なのである。

全ての幽霊が骸骨に縛られていたわけではなく、骸骨から遠く離れることができた幽霊もいた。例えば、甲志卷第四の「項宋英」では、温州人の項宋英が婺州に旅行した時、友人の部屋で女の幽霊に出会い、數年後に臨安の旅館で再會している。三志卷第十の「解七五姐」では、解七五姐の幽霊は千里を越えて夫を探していた。丁志卷第二十の「郎巖妻」では、郎巖の妻の幽霊は絶え間なく畫工の黄生を追っている。彼女たちの場合、まだ骨が残っていたかどうかはわからないが、餅家の小紅と同様に骸骨を失って流浪していたのかもしれない。更に、甲志卷第十二の「縉雲鬼仙」の縉雲の英華のように「鬼仙」と自稱し、普通の幽霊より強い力を持つ者は、骸骨に縛られなかった。

しかし、大多數の幽霊は、骸骨が残っていれば、そこから遠く離れることはできなかった。例えば、解三娘は趙豊が彼女の法事を行うまでの三十年間常に骸骨の傍にいた。また、丙志卷第九の「吳江九幽醮」は、乾道三年（一一六七）、吳江知縣の趙伯虚が度重なる船の轉覆事故によって多くの人が溺死したので、「幽冥間の滯魄には訴えるところが無いことを考え、道士を集めて、縣の役所に九幽醮を設けて濟度を行った⁽⁹⁾」話であるが、溺死した人の幽霊は「ここで長く困り果てています」といつている。そうした制約の中で多くの幽霊は崇りをなし、その空間は小さな部屋の場合すらある。驛の役人が話した通り、母屋の西側にいれば、解三娘の幽霊に邪魔されることはなかった。

だからこそ、骸骨のあるところが幽霊の崇りによって、恐ろしい場所になることが往々にしてある。乙志卷第十七の「滄浪亭」の話がその良い例である。滄浪亭は金が侵略した時の大量虐殺によって、骨が池中に堆積するまでになった。

やがて、幽霊が崇つていくという噂が流れ始めた。「月の夜毎に必ず數百人が池のほとりに出沒した。僧、道士、婦人、商人らが歌ったり叫んだりして入り亂れ、しばらくすると必ず悲嘆にくれて靜まるのであった。」^⑩こうして、滄浪亭は有名な幽霊屋敷になった。北宋末から南宋初期にかけての兵禍の中で死者が大量に出たので、このような話はよくあった。支癸志卷第七の「光州兵馬蟲」は、光州の舊甲仗庫に起きた話である。「亂離の時に際して民には逃げ隠れるところがなく、全てこの部屋で首をくくって自殺した。これはその繩索である。風雨で暗くなった夕方には、幽霊の泣き聲がして、聞くに堪えない。」^⑪

『夷堅志』以外の宋代の筆記小説にも類似の物語が記載されている。それらの幽霊たちは崇り以外にもたくさんのができた。例えば、『續夷堅志』卷第一の「玉兒」では、「太學の側に逆さまに埋められた」玉兒が「寝ている人々の體をすべて手でたたいて、この人は（科擧に）合格し、この人は合格しなと言った。」^⑫また、『青瑣高議』前集卷之一の「叢塚記」と「叢塚記續補」には、幽霊が迷い人を助けた話が書かれている。皇祐年間（一〇四九―一〇五四）、黄河の堤防が決壊したせいで山東の食糧が不足し、大勢の人が亡くなった。富弼はその遺骸を収集し、まとめて埋葬して「叢塚」とした。書生の王企は道に迷い、誤って叢塚に入ってしまったが、彼は相手が幽霊と知らないまま、叢塚で歡待されたという崇りをする幽霊であれ、人を助ける幽霊であれ、宋人の認識において骸骨と幽霊の間に必然的な關聯があったことを示している。骸骨を埋葬している場所には幽霊が出やすく、幽霊がよく出る場所には骸骨がある可能性がかなり高い。こうした話は洪邁の周圍にも存在した。乙志卷第八の「秀州司録廳」は洪邁の家族が身をもって經驗した話である。

秀州の司録の役所には怪異が多く、いつも青い頭巾に布の上着を着た、背が低く太っていて歩みが遅い者がいた。毎晩出て来ては時を知らせる夜回りの兵士を惑わす女も居た。父が赴任していた時、上の兄の丞相（洪邁）は九歳であつたが、晝間に何かを見たようで、目を見張りながら、「水、水」と叫び、しばらくしてから意識を取り戻したことがあつた。その二日後、父が夜に州の役所から歸つて来た時、侍妾が官服を持って後ろに従っていたが、突然大聲

を上げて地面に倒れた。⁽¹³⁾

屋敷の内には佛陀や眞武、更には土地神と竈神もいたが、幽霊たちは相變わらず屋敷に祟り、少年や侍妾に憑依した。こうした父と兄の體驗が洪邁に影響して、幽霊や幽霊屋敷の話が容易に信じるようにさせたとも考えられる。

このように、幽霊と骸骨には密接不可分な関係がある。前掲の「吳江九幽醜」には「滯魄」という語が見えるが、滯魄と骸骨の関係は他の話にもある。乙志卷第二十の「蜀州女子」は、蜀州の録事參軍蘇彦質が段家女の幽霊に頼まれて彼女の骸骨を改葬した話だが、段家女の幽霊は「蘇さまに改葬してもらえなければ、滯魄になるでしょう」と語っている。⁽¹⁴⁾『夷堅志』とほぼ同じ時期の志怪小説『睽車志』卷三にも、「滯魄」が人の命を奪ったという記載がある。和州に新築の兵舎があり、そこに引越したばかりの兵士とその家族が一夜の内にすべて死んだ。結局、衆人は邸内の怪異を發見された二つの骸骨のせいにして、「滯魄の祟り」と稱した。これらの幽霊たちが滯留しているのは、骸骨がここにあるからである。

(2) 骸骨に付き従って移動する

注意すべきは、幽霊は往々にして亡くなった場所を徘徊しているという考え方である。盧秀滿は、これを宋人の普通の認識だとして、『夷堅志』に記載されているこのような物語全體から見ると、場所でいえば、地縛靈が最もよく現れたのは宋代各地の寺院、そして邸店及び官舎あるいは官廨である。寺院が多くの幽霊が徘徊する場所となったことは、宋代の「菽柩習俗」と関係がある。死者の棺を寺院に置くことが宋代にかなり流行していたせいで、各地の佛寺に幽霊が現れたという言い傳えがよくあった。そこに投宿した人々が幽霊と會った事件は宋人の志怪・筆記の多くに見られる」(前掲書一
一一頁)とする。

宋代において、棺がよく寺院に置かれるのは事實である。盧氏はそれを幽霊が亡くなった土地に「地縛」されたとする

が、幽霊と骸骨の深い關聯に氣づいていない。多くの棺が寺院に置かれたからこそ幽霊が祟りやすい場所になったのであって、このことはまさしく幽霊が亡くなった場所ではなく、自身の骨の周圍を徘徊し、骸骨に従って移動することを説明している。さもなければ、彼らの亡くなった場所が別々である以上、幽霊が寺院に集中するわけがない。「地縛」より、「屍縛」或いは「骨縛」というほうが適當だろう。

實のところ、幽霊が徘徊するのが亡くなった場所なのか骸骨のありかなのか、見分けがつきにくい場合がある。横死した場合、通常その場でいい加減に埋められた。解三娘の幽霊は亡くなって埋められた場所に現れている。この場合、幽霊は骸骨に縛られるのか、あるいは亡くなった場所に縛られるのか、判別しにくい。しかし、筆者は亡くなった場所より骨の方がより一層重要であると考ええる。骸骨は幽霊を牽制できるからである。より具體的に言えば、幽霊は骸骨に付き従って移動するのである。

幽霊が骸骨に付き従って移動することは、『夷堅志』の多くの物語に見られる。例えば、甲志卷第十一の「張太守女」はその一つである。

南安軍城外東郊に嘉祐寺があつた。紹興年間（一一三一—一六二）の初め、知軍張朝議の娘は、夫が嶺外に行つたまま歸らなかつたため、鬱きこんで若死にした。その寺に假に埋葬したところ、夜になると姿を現し、多くの人が目撃した。（中略）紹興二十年（一一五〇）、知軍都聖與（諱は）潔は大庾縣の知縣を引き連れて、娘の遺體を五里離れた山中に改葬したが、今でも時折姿を現し、近在の住民と交わっている。¹⁵

張太守の娘の幽霊が骸骨に付き従って移動したことは明らかである。洪邁は末尾で「自ら嘉祐寺に行つた」と書いているが、物語の眞實味を強調しようとしたものであろう。

幽霊が骸骨と一緒に移動する物語は多い。例えば、丙志卷第十一の「朱氏乳媪」では宣和中（一一一九—一二五）の大太學官である朱漢臣の乳母が「私は朱家の乳母であり、不幸にも客死しました。今ある坊庵に身を寄せていて、かなり不便で

す。私（の骸骨）を連れ歸ってください⁽¹⁶⁾」といっている。また、丁志卷第九の「太原意娘」は、韓師厚が使節として金に赴いた時に亡くなった妻の意娘の骨灰を思いがけず見つけ出し、建康へ連れ戻したという話である。意娘は「私を思ってくださいありがとうございます。孤魄はここに住んでいて、歸ることを願わずにはいられません。君に従って南に歸れば、常に私を見てくださり、幽冥の寂しさを慰められます。あなたが再び妻をめぐって私を顧みないのであれば、南に行かないほうが良いです」と言って南に歸りたがった。しかし、韓師厚が二人の誓いに背いて再婚すると、「あちらにいた時は非常に心安らかだったのに、あなたは私を無理やり連れてこられました⁽¹⁷⁾」と彼を非難した。幽霊自身は骨の移動に對して何も干渉することができない。

以上の物語から見ると、骸骨の移動は多くの場合、望郷の情と関係がある。幽霊が骸骨に付き従って移動することで、「魂歸故里」や「葉落歸根」も成立するのである。史書にも同様の話を載せる。宋代のことではないが、天祿二年（九四九）の後晉安太妃の「骸骨を燃やして灰となし、南に向けて飛ばし、遺魂を中國に歸してほしい」、そして翌年の李太后の「私が死んだら骸骨を燃やして范陽の佛寺に届けてくれ、虜地の幽霊にしないでほしい⁽¹⁸⁾」との遺言を、『契丹國志』（卷四、世宗天授皇帝）が書きとめている。彼女らの認識では、骨灰になっても、靈魂はまだその中に残っているから、骨灰を故地に持ち歸れば、靈魂も一緒に歸れるのである。骸骨と靈魂の関係が、盧氏のいう「地縛」の関係より一層深いことは明らかである。

(3) 骸骨を支配する

前項では、幽霊が骸骨の制約を受けていたことを述べたが、両者の関係はそれだけではなく、幽霊が骸骨を支配することもあった。

北京の故宮博物院には、南宋の畫家李嵩の『骷髏幻戲圖』が收藏される。繪の左に大きな骸骨が描かれるが、その姿形

と衣服は生者と同じである。この骸骨は小さな骸骨を操って、目の前を匍匐している子供をあやして遊んでいる。多くの研究者はこの繪を道教や佛教と關聯づけ、寓意を探索しているが、ここでは骸骨を怖がる者が一人もいないという點に注目したい。李嵩が表現しようとしたのが本當の骸骨であるのか、それとも骸骨に扮した何者かであるのかはともかく、當時の人々は既に「骸骨」というイメージに慣れていたことがわかる。

更に、人々は骸骨が不思議な力を持っていると信じていた。『骷髏幻戲圖』の中の骷髏は明らかに意識と行動能力を持つている。骸骨は幽霊と一體となり、幽霊が骸骨を支配して動かすのである。『夷堅志』には、幽霊が直接骸骨という形で現われた物語がいくつかある。例えば、甲志卷第十六の「化成寺」は、寺院に置かれた骸骨が泊まった客の動きを眞似して、最後は粉々に碎けてしまった、という話である。骸骨が動いたのは、幽霊が何らかの意識を付與したからだろう。能力がさらに大きいと、生きた人さなならにもなれる。丙志卷第二の「羅赤脚」は、宣和年間（一一九一―二五）に「靜應處士」に賜封された羅赤脚にまつわる不思議な話である。紹興六年（一一三六）に羅赤脚は王志行の妾が人ではないことを暴いた。「數斗の湯を沸かして、竈の下から一籃の灰を取るよう命じた。（そして）妾を呼んで来て、巾でその頭を覆いかぶせて、湯を灰の上に注いだ。煙がたくさん出て、彼女はすぐ倒れた。一揃いの枯骨だったのであろう。」¹⁹骸骨は自由に動けただけでなく、更に女の姿に化した。これらの幽霊は骸骨を直接的に支配し、一體になって再び現世に戻った。丙志卷第十四に「王八郎」という物語がある。王八郎は娼妓との結婚を望み、妻と離婚した。二人がそれぞれ亡くなった後、娘が両親の遺骨を合葬しようとする、不思議なことが起こった。「同じベッドの上に寝かせていたが、見張り番が少し目をはなすと、二つの骸骨は東と西にそっぽを向いていた。」²⁰元夫婦の恨みは死後まで續いていて、骸骨になっても和解できなかったのである。

妖魔鬼怪には全て不思議な力があると傳統的に認識されてきたが、その力の一つは自在に變幻する力である。徐龍華『中國鬼文化』（上海文藝出版社、一九九一年）は「いわゆる生命力とは、それらの神仙鬼怪が人のような生命と感情を有し、

行動する、つまり彼らの身に人間の特徴の全てが備わっていることを指す。(中略) いわゆる魔力とは、それらの神仙鬼怪が人間の意味と特徴を備えている他に、更にある超自然の力と法術を持っていたことを指す」(三〇八頁)と述べる。

前掲の「蜀州女子」で、女の幽霊は「何故改葬されてもまだ部屋を徘徊するのか」と聞かれ、「地中から出た時に、人夫の不注意で、私のすねの骨を傷つけ、切れてしまいそうになりました。今は行くことができず、やむを得ずここに留まっているので、他意はありません⁽²¹⁾」と答えた。現実の骸骨の損傷が幽霊にもダメージを與えているが、單なる骸骨には魔力と生命力は備わらず、これらは思想と感情を持つ幽霊にしかないものである。

2 骸骨の完全性

(1) 骸骨の完全性翼求

解三娘の話には、もう一つ注意すべきところがある。解三娘にとっては骸骨が完全であることが重要であり、特に「頂骨」がないと轉生ができないということである。骸骨の完全性が幽霊にとって非常に重要な意味を持つことは、他の物語にも示されている。前章で言及した「滄浪亭」において、ある男の幽霊は「他の者たちはみな連れて行ってもらいましたが、私はまだ兩腕がここに残っています。どうか最後に私をお助け下さい⁽²²⁾」と言った。これを見ると、幽霊にとっては骸骨が完全なことが重要だったことが分かる。

幽霊にとっては、火葬されても遺灰があればよかった。例えば、第一章で觸れた「王縣尉小箱」で、娼妓の骸骨は火葬されたが、まだ生命力を持っていた。當時の人々の認識では、火葬は骸骨の本質を變えるものではなかった。一方、骸骨に損害があれば、必ず幽霊に影響する。例えば、丙志卷第十二の「吳旺訴冤」は、紹興十五年(一一四五)に吳縣の知縣陳祖安の甥女の陸氏が吳旺の幽霊に憑かれたという話だが、幽霊は骸骨が壞されて殘骸が少ないので、再び埋葬されてもほとんど意味がないと思っていた。

『二程遺書』卷二下に「古人の法では、必ず大きな悪を犯すとその死體を燃やした」²³とあるように、火葬は例外的であるというのが傳統的觀念であった。しかし、宋代において火葬は珍しくなく、多くの研究者がこの問題をめぐって詳しく論述している。たとえば、張邦煒・張敏兩氏は「兩宋は我が國の歷史上最も火葬が盛んな時期である」と述べ、更に火葬が流行した原因として宋人が佛教を信仰していたことと、朝廷の禁止が徹底されなかったことを擧げている。また、火葬には衛生と節約の二つのメリットがあるとしたうえで、最も重要なのは土地の不足によって死者と生者の間の土地争いの問題が顯著になったことだとしている。²⁴

洪邁は『容齋續筆』卷第十三の「民俗火葬」で「釋氏の火化の説以來、死體を燃やす者はどこにでもいる。猛暑の際には腐敗を恐れ、納棺したその日に體が冷たくならないうちに燃やされる」²⁵と述べている。また、『夷堅志補』卷第三の「七星橋」には「衢人の習俗では、亡くなった者は全て西溪の沙洲の上で火化する」²⁶とあり、地方の習俗にまでなっていることが分かる。『夷堅志』のほかの物語を見ても、當時の人々の火葬に對する態度は寛容である。「幽靈にとつては骸骨が保たればそれでよい」という觀念が、宋人の火葬に對する見方に影響したのではないだろうか。

『夷堅志』の物語から見ると、骸骨の完全性は幽靈にとつて明らかに重要な意味を持っている。骸骨が失った部分は幽靈も同じく失う。完全に揃っていない骸骨で轉生すれば、來世に影響しかねない。骸骨が分散すれば、埋葬の意味もなくなる。

人々の意識の中では、死亡とはただこの世から別の世界へ入っただけのことであり、しかも往々にして現實の世界に基づいて見知らぬ幽界を想像している。宋人の想像の中で、あの世はこの世とほとんど區別がない。甲志卷第十六の「晏氏媪」では、晏殊家の乳母が死後幽冥界で使う婢僕を乞うている。この物語の婢女は弱々しくて役に立たなかつたり、他の幽靈に誘拐されて密かに逃げたりと、この世の婢女と全く變わりない。あの世がこの世と同じだからこそ、骸骨が揃っていることが幽靈に影響すると考えるのである。

(2) 頂骨の意味

死者も生者同様であるとすれば、最も重要なのは頂骨（頭蓋骨）である。これは解三娘の物語にも見られる。彼女は譚詠に頂骨を取り出すことを忘れないようにと念押しした。轉生に必要なことからである。『青瑣高議』前集卷一の「葬骨記」では、熙寧四年（一〇七二）に幽霊である謝紅蓮が女奴に取り憑いて骸骨の埋葬を求めた。謝紅蓮はまず夢で骸骨の位置を告げたが、掘り出されたのは體の部分だけだった。官吏は彼女の頭蓋骨がなく、完全でないのを見て、彼女が現れるのを待つことを命じた。するとようやく頭蓋骨が見つかった。丙志卷第一の「九聖奇鬼」では、二十一體の鬼怪は神將に捕られた後全て斬首され、「そのうち十五體の背中に『山魃が不道なので、天がこれを誅するよう命じた』、六體には『昔埋められた死體で、墳墓におらずに一般人に害を及ぼす者は、首を斬ってさらす』²⁷とそれぞれ焼印を押されている。昔埋められた死體が斬首されるのは、逆に言えばそれだけ頂骨が重要であることを示している。

「骷髏」は現代漢語では骸骨という意味だが、元々は頂骨を意味した。それだけ頂骨が重要だったということである。支戊志卷第五の「關王池」という物語で、主人公の徐大忠が「醫書の中に天靈蓋（頭蓋骨）が薬になると書いている」と言い、また幽霊が「死んでから何年経つのか分からない。あなたのおかげで出られて、超脱を望んでいたのに、思いがけず薬の箱に入れられて、これでは生まれ変わる望みがない。しかも三魂七魄は長く分散していて、ただ一つの魂はここで待っていたのに、また頭を失った。」²⁸と言っている。つまり、幽霊にとつては、骸骨が完全に揃うのが望ましく、特に頂骨が必要である。

頂骨は單なる骸骨の一部分ではなく、強い力が秘められていると考えられていた。丁志卷第二十の「黃資深」は、秀才黃資深が家庭教師先の王氏の娘と稱する女と交わった話である。女はじつは犬の妖怪であった。王氏の子弟が妖怪の後をつけると、「そこで、ぼろぼろの墓地に入って、髑髏をかぶって出た。」²⁹つまり、犬は髑髏をかぶって人になったのである。すでに唐代の『西陽雜俎』前集卷十五には、紫狐が骷髏をかぶって北斗に頼ずくと人間同様になれると述べられている。

宋代の『泊宅編』巻第七の記載はより一層詳しい。

狐は美しい婦人となって人を魅惑できる。しかし、必ず長い間墓地に埋められていた髑髏を借りて、頭にかぶって北斗を拜さねばならない。この時髑髏が落ちなければ、即ち冠となる。使い終わったら埋め、使いたい時は同じようにする。これを借りないと、變化できない。人が亡くなって骨が朽ちて髑髏となってもまだ靈がある。古い薬方では天靈蓋を使つて勞疾を治療する。病氣を治せるくらいだから、どうして妖になれないことがあるうか。世の中で術がある者は、髑髏に仕え、他人の過去を知る⁽³⁰⁾。

「關王池」と同じく、天靈蓋が薬になるというが、更に重要なのは頂骨が不思議な力を持つていることを強調している点である。文中の「髑髏」は明らかに頂骨を意味している。狐は髑髏を被り北斗を拜することで人の姿になれる。それは「人が亡くなって骨が朽ちて髑髏となってもまだ靈がある」からである。

このように頂骨には不思議な力が秘められており、幽靈にとつては最も重要な意味を持つ。解三娘などの幽靈が頂骨にこだわるのも、このように考えれば理解できるのである。

3 骸骨と幽靈の蘇生

以上の分析から、幽靈と骸骨の間に非常に緊密な関係があることは明らかである。解三娘は趙豊に自分の骸骨を掘り出して、埋葬することを懇請した。そうしなければ、彼女は轉生できないからである。骸骨は多くの場合、幽靈の據り所であるだけでなく、幽靈の蘇生にも深い関係がある。

乙志巻第七の「畢令女」では、幽靈の蘇生が阻まれている。靈壁知縣の畢造の次女は、幽靈に取り憑かれた状態から抜け出せないでいた。そこで、符籙で幽靈を退治する名人といわれる路時中を迎えた。路時中は女に憑いているのが彼女の姉であることを知る。長女は命数がまだ残っていたために、冥司に引き取ってもらえず、幽靈のままずっとさすらい

たのである。幸いにも彼女は九天玄女と出逢って、祕密の法術を授けられた。當時長女の骸骨は寺院に置かれていたが、その間に士人と往來して戀をした。そして間もなく生き返るはずだったが、仲の悪い妹に邪魔されたのだという。

蓋の板を開くと、長女がちょうど正座して、男子の頭巾を縫っていた。腰から下は皆新しい肉が生じており、皮膚の表面は柔らかくて温かだったが、腰から上はまだ肉が干からびていた。(中略)(長女が言っていた) 九天玄女の話というのは、道家でいう回骸起死(よみがえり)のことで、生者と一緒に長く住むことによつて、生き返ることができるといふものではないか。⁽³¹⁾

これは前節で言及した「解七五姐」の内容にも似ている。七五姐は幼い頃から密かに道法を學んでいたが、結婚後夫と両親の關係が悪く、ふさぎ込んで亡くなった。彼女の幽霊は千里を越えて夫を探し、生前と同じように仲良く暮らしていた。彼女の家族は二人を見つけると驚きのあまり「七五姐が不幸にも亡くなったのは七年前であり、しかも(彼女の骸骨はすでに)焼いて灰になつてゐる。これは必ず精魅が偽つたもので、やがて施郎(夫)に不利を働くだらうから、その對策を考えねばならない」と言つと、彼女はこう釋明した。「私は生前、父の法書をすべて讀みました。また夢の中で、⁽³²⁾宮玄女が生き返る方法を教えて下さつたので、再び人間となつて、この世に永遠に住むことができます。」「ここでも、やはり天女から法術を會得することで新たな命を得ている。また、支庚志卷第一の「鄂州南市女」の吳氏女は、墓地を掘り出した樵夫のおかげで生き返ることができたと言つてゐる。蘇生には法術や生者の力が缺かせない。

これらの蘇生譚には多かれ少なかれ宗教的色彩があるが、骸骨がまだ残つてゐるということが條件となる。『癸辛雜識』別集の「假尸還魂」は、建康の陳道人が若く健やかな男子の死體をもらつて、術を利用して元の體を捨て、男子の體を新たな體とした。骸骨がないと、この術も成立しない。

第三章 骸骨を埋葬する

1 骸骨の埋葬冀求

趙豊は解三娘の涙ながらの訴えを聞くと、最初は彼女の骸骨を掘り出さず、法事を行った。これ自體大きな恩恵だが、解三娘の幽霊にとつては物足りなかった。「吳旺訴冤」の中で、吳旺は自分の骸骨がばらばらになってしまい、埋葬されてもほとんど意味がないので、やむをえず「あなた様が私を哀れんでくださるのなら、生まれかわるために水陸會をお願ひします⁽³³⁾」と言った。多くの幽霊は適切に埋葬されることを願った。例えば、甲志卷第三の「李尙仁」という物語の中の主人公がそうである。

王承可(諱は)鉄は、紹興辛酉(一一四二)の年、提舉浙東茶鹽となった。役所は會稽縣の子城の東にあり、昔の龍興寺があつた場所である。承可の第三子の洧は、一人の男子が(高官が着る)紫袍を着てやつて来て、「私の朽ちた骨が桃の木の下に埋められ、魂が歸るところがありません。どうか哀れと思つて、改葬してください」と告げる夢を見た。洧は目覺めると、父に話した。官舎の側に桃の巨木があるのを見て、その下を掘つて骨を捜したが、見つからなかった。翌年八月の晦日に、また、朝請大夫李尙仁と名乗る者が會いに來る夢を見た⁽³⁴⁾。

李尙仁は二度も夢に現れて懇願し、更には詩を作つて諂いまでして、ようやく埋葬された。また、支丁志卷第七の「郭節士」の郭節士は、冥官によつて神とされてもなお埋骨を求めていた⁽³⁵⁾。これらから見ると、幽霊にとつて埋骨は再度生まれまゐることと同じくらい大きな恵みであつたと考えられる。このテーマをめぐる物語は他の筆記にも見られる。例えば、『墨莊漫錄』卷一の「吳伴姑」は、胡元質が利州の知州だつた時に女の幽霊が埋葬を求める夢を見た話である。

前章で言及した「叢塚記續補」の中で、老叟の幽霊は「私のように歸る場所がない者は、富公と刺史のおかげでここに

集められて安らかに暮らせるようになった。その時から生まれ変わった者は半分以上だ。富公はこの徳により、すでに神仙になっている」と感嘆した。さらに、文末には「骸骨の埋葬と改葬は、陰徳としてこれより良いものはない。叢塚下の幽霊がその徳と恩恵に感じ入っているとこころから見てもそれが分かる。ただ大人と君子だけがこのような善事をなそう」と記される。⁽³⁶⁾ 富弼は叢塚を作らせて據り所のない骸骨に安住の地を興えた。それによって、彼らの幽霊も死後の安寧を得て、轉生できたものさえた。彼の行爲は幽霊に深く感謝されただけでなく、當時の人々に賞賛された。『青瑣高議』の作者である劉斧はこれを大いに稱揚して、埋骨は計り知れない功德であるとしている。この話は富弼の人生の重要な一幕として、彼の傳記・行狀・神道碑銘にも記されている。⁽³⁷⁾

洪邁も埋骨に對して同様の觀念を持っている。支甲志卷第六の「張尙書」は、張彥文の慈悲の心を旨とする物語である。彼の善行の一つは、杏園寺に宿泊した時、婦人が埋葬を乞う夢を見てその棺を改葬したことで、洪邁はわざわざ「(彼の)その同情の心はこのようである」⁽³⁸⁾と述べ、彼が埋骨を重視していたことが分かる。

逆に、墓地を破壊して幽霊の身の置き所を奪えば、悪報をもたらすことになっている。支丁卷第一の「建康太和古墓」は、成彦信が財寶を得るために古い墓地を發いて悪報を受けた話である。また、乙志卷第七の「西内骨灰獄」は、政和四年(一一一四)に西京の宮殿を修理するため、徽猷閣待制宋君らが大量の牛骨と灰を求め、洛陽の郊外で數十箇所の千人塚を發き骸骨を焼いて、死後に泰山府で残酷な罰を得たという。

骸骨を壊さなくても、埋葬しなければ悪報をもたらすことがある。『癸辛雜識』續集下の「不葬父妨子」に「父母が亡くなつてから長く葬っていない者は、その子孫も毎年少なくなるといふ人がいる。」とある。⁽³⁹⁾ 子孫が受ける報いは科擧に關するものが多い。例えば、甲志卷第七の「羅葦陰譴」には、大觀年間(一一〇七—一一〇)太學生の羅葦はいつも科擧に失敗していたが、その理由は「ただ父母(の骸骨)を長く葬らないためである」といふものだった。⁽⁴⁰⁾ おなじく甲志卷第七の「不葬父落第」に「お前の父が亡くなつたのに葬られていないので、合格はまだ期待できない」⁽⁴¹⁾、甲志卷第十八の「楊

公全夢父」に「士人の中で父母をまだ葬っていない者は、太學に入ること許さなかつた」などと述べられる。このように兩親すら埋葬されない状況に對する批判が、幽霊が祟るといふ物語となつたとも考えられる。

埋骨の重要性は、現實において次の二つの事象を生み出した。自力で埋葬できない骸骨に對して、朝廷が漏澤園を設置して骸骨をまとめて埋葬したこと、自力で埋葬できる者の風水重視である。

2 宋人が埋葬を重視する

(1) 漏澤園

漏澤園は骸骨の埋葬のために北宋後期に設立された。⁽⁴³⁾元豐年間(一〇七八―八五)に初めて作られ、⁽⁴⁴⁾崇寧三年(一一〇四)から普及し、⁽⁴⁵⁾變亂を経て、南宋初期に至つて次第に回復した。⁽⁴⁶⁾洪邁の時代にはもはや珍しいものではなく、『夷堅志』にも漏澤園が出てくる。⁽⁴⁷⁾

自分の骸骨を埋葬された幽霊は幸運である。それに比べると、多くの孤魂野鬼は適切に埋葬されず、その骸骨は荒野に晒されるか、一掬の土で粗雑に埋められた。意圖的に殺された解三娘のような場合は別にしても、様々な理由で埋骨されなかつた幽霊は多い。戦死して埋骨の場所もない人が多かつた。⁽⁴⁸⁾前章で言及した「滄浪亭」などに登場する數多くの幽霊も靖康の兵禍によつて亡くなつたものである。他の筆記にも似た記載があり、例えば、『癸辛雜識』續集上「李仲賓談鬼」は、金の兵亂で死亡し、井戸に捨てられた幽霊の話である。また、埋葬の土地が不足することもあつた。支乙志卷第九の「鄂州遺骸」が良い例である。鄂州は人口が多いのに土地が狭く、遺骸が空地に積み重ねられ、埋葬されても間もなく土から現れたという。

南宋では、多くの漏澤園が作られた。たとえば、行在の臨安府では、錢塘と仁和兩縣の管轄下に十二箇所あり、更に餘杭・臨安・於潛・富陽・鹽官・昌化などの各縣に設立された。⁽⁴⁹⁾『嘉定赤城志』(卷五)や『嘉泰會稽志』(卷十三)などにも

多くの記載がある。『夷堅志』では、たとえば支乙志卷第四の「優俗箴戲」で言及される。「人間は死を免れられない。ただ貧しい庶民には歸る場所がないので、空地を選んで漏澤園を設立し、納棺できないなら、棺を與えて埋葬できるようにさせた。春と秋に祀られて、恩恵は死後にも及ぶ。」⁽⁵⁰⁾また、『清波雜志』卷第二には、蔡京について「六賊と違い、ただ一人殺されることを免れた。あるいは彼が權力を握っていた時、居養・安濟・漏澤を設立し、貧しい者が養われ、病人が治療され、死んだ者が埋葬されて、その陰德のお蔭だというものもある。」⁽⁵¹⁾と述べている。蔡京の悪評とは別に漏澤園設立を評價する見方もあったのであり、それだけ骸骨の埋葬が重視されていたのである。漏澤園以前にも、すでに言及した「叢塚」が数多く作られている。しかし、裏を返せば、それだけ自力で埋葬されない骸骨の数が多かったということでもある。

(2) 墓地の選擇を重んじる

自力で埋葬できない骸骨には漏澤園の庇護があつたが、埋葬が可能な人々は墓地選びを重んじた。中國の傳統的な觀念の中で、墓地における風水の優劣は死者だけでなく、生きている家族及び子孫にとつても重大な影響があるので、墓地選びは重視された。しかし、風水を過度に重視したために問題も起きた。『鶴林玉露』卷之六「風水」は「緣起の良い墓地を求めて意にかなわず、數十年も親を埋葬しなかつた者がいる。すでに埋葬したのに緣起が悪いといつて一度掘り起こしてまだ足らず、三、四回も掘り起こす者がいる。墓地の購入がらみで訴訟になり、棺が埋葬されるまえに家業が傾いた者がいる。各房風水の説に惑わされて、兄弟數人かたき同士になつた者がいる。」⁽⁵²⁾と指摘する。司馬光も「葬論」でこの弊害を厳しく批判した。「今の葬儀は昔に比べて厚いとはいえないが、陰陽禁忌へのこだわりはひどい。(中略)(今の葬書はこの時この場所でなければ埋葬できないと言ひ、世をあげてこれを信じている。」⁽⁵³⁾

墓地の選擇について、『夷堅志』にも具體的な記述がある。丙志卷第十九の「宋氏葬地」という物語は洪邁の知り合い

について述べたものである。

宋文安公（名は白）、開封府の人で、二世代にわたって鄭州に葬られている。方士が墓地を通りかかり、側の谷の水を指して、「ここは五行書によると極めて良い場所ので、將來は天子が出るはず」と言った。宋氏が聞いて恐れて、人夫を使って全力で水を塞ぎ、平らな土地となった。それから子孫は官僚にならず、また科擧に合格できた人もなかった。崇寧年間（一一〇二—一〇六）の初め、大水が氾濫して、昔の谷に突き当たって幅一尺ばかりの小さな水路となった。翌年、曾孫の宋渙が科擧に合格できた。宋文安公の死後ちょうど百年目である。また六年後、兄の宋榘も合格した。しかし、宋渙の仕途は郡守にとどまり、宋榘も博士で亡くなった。その子孫で出世した者はいない。宋榘と私の妻の父は同じ家の女婿である⁵⁴。

方士が登場して豫言し、それを信じて墓地を變えるといった話はよくある。「春渚紀聞」巻第二の「張鬼靈相墓術」には、自ら實地調査をしなくとも圖面を見るだけで墓地の適否を判断できる方士が登場する。また、司馬光は「葬論」で一族の埋葬問題に言及し、「埋葬は家の大事であり、陰陽師になぜ問わないのか。このまま葬るのはいけない。」⁵⁵という一族の總意を受けて、兄がやむなく方士を買収して、自分で決めた日附や墓穴の深淺などを彼に言わせて、ようやく一族を納得させたと述べる。

一族の浮沈が風水にかかっているという話は多い。例えば、支景志卷第一の「朱忠靖公墓」・卷第四の「榮侍郎墳」などである。また、卷第十の「姚尙書」では、術者がある土地の二つの穴について、上の穴に葬るとすぐ科擧に合格するが、長生きできなくなる。下の穴に葬ると、三十年後に出世して執政になると語る。あるいは、卷第四「金雞老翁」では、墓地選びの際にその位置が夢で告げられている。また、「夢溪筆談」補筆談卷三「異事」には、大中祥符年間（一一〇〇—一一〇八）廉州の梁氏が親を龜の墓穴に葬り、子孫は科擧や官場で順風満帆であったという話を載せる。

更に、墓地だけでなく、時には棺も問題になる。丁志卷第六の「陳墓杉木」は、杉の木を切ろうとした陳普の夢に白鬚

の老人らが現れて「この木を管理してから三百八十年になるが、これは黄察院の棺となるはずのもので、伐採してはいけない」と話したのに、陳普が聞かずに最後は災いを受けたという話である。

宋人が書いた墓地選びに關する物語は枚擧に暇がない。當時の人々はそれだけこのテーマに深い關心を持っていたのである。そして、墓地選びの重視は當然、死者の埋葬重視の表れでもある。

宋人は觀念上においても、實際の行動においても、骸骨の埋葬を重視していた。適切に埋葬されなかった幽霊は解三娘のように、粗略に埋められた骨の中に身を寄せ、現世を彷徨して轉生できないし、常に崇りをなす「厲鬼」(惡靈)になった幽霊もある。支景志卷第二の「鄧富民妻」では、自殺した鄧富民の妻の崇りに家族は長い間苦しんでいたが、彼女の骸骨を埋葬すると崇りはすぐに止んだ。

このように、骸骨の埋葬は幽霊にとつて大切である。しかし、數多くの骸骨は適時に埋葬されず、棺が寺院に置かれることも多かつた。

3 骸骨が寺院に放置される

宋代には、よく死者の骸骨が寺院に置かれた。漏澤園に最初埋葬されたのも、もともとは寺院に置かれた骸骨である。前掲の「張太守女」・「朱氏乳媪」・「化成寺」・「畢令女」ではいずれも骸骨が寺院に置かれていた。また、「李尙仁」で幽霊が現れた公廟は元々龍興寺であり、「張尙書」の主人公張彦文も杏園寺に泊まった夜に夢の中で幽霊と會っている。

盧秀滿は、遺骸を寺院に置くという宋代の風習について論じ、「宋代以前、このようなやり方は盛んに行われておらず、未だ風習になつてはいなかつた。しかし、宋代以後、このように棺を寺院に置くという状況はますます收拾できなくなつた。棺を寺院に置くことは常態となつて、一部の宋人は次第にこうした處理を日常的なものともみなすようになった」と指摘する(前掲書一四三―一四四頁) 一方で、第四章第四節「宋人對久喪不葬及敢柩寺院之看法」では宋人の批判的な見方も

紹介しているが、寺院への柩の寄置への批判については簡単に觸れるにとどまっている。

棺を寺院に置くということは、即ち長い間埋葬しないということである。古くから、葬期は「天子は死後七日から殯をし、七月後に葬る。諸侯は死後五日から殯をし、五月後に葬る。大夫・士・庶人は死後三日から殯をし、三月後に葬る。」と定められていて、亡くなって久しいのに埋葬しないというのは、禮に合わない。しかし、宋人の葬期は非常に長く、多くの場合六箇月を越えた。南北で墓の構造はかなり異なるが、葬期に顕著な差はない。⁽⁵⁸⁾ 盧秀滿は宋代において骸骨が長く埋葬されない原因を土地の狭さ、禁忌と風水に對する迷信及び貧困に歸している（前掲書一四七―一五五頁）が、重要な點が見逃されている。それは、南宋初期に北から移つて來た人々の歸葬の問題である。彼らは故郷に歸るに歸れず、その一方で死者を歸葬したいと願っていたから、とりあえず寺院に柩が寄置されることも多かつたはずである。南宋皇族の陵墓が「攢宮」と稱されたのも、開封への歸葬が想定されていたからである。

しかし、現實には柩が寺院にそのまま放置されることはありふれた日常になり、それを嘆く幽霊が現れるようになる。『夷堅志』には、これらの幽霊たちが寺院に泊まった旅客の前に現れる物語が多い。例えば、丙志卷第十五の「阮郴州婦」の幽霊である。戸部員外郎阮閔の息子の妻は病氣で亡くなった。家族は彼女の遺體を天寧寺にしばらく置くつもりだったが、彼女は一緒に歸りたがった。

私（の遺體）は寺院に置かれ、客鬼であり、伽藍神に拘留されています。しばらくの間は家に歸れますが、毎朝毎晩鐘が鳴る時には必ず走つて行つて、命令に従います。とても悲しくて苦しいです。今一緒に歸れなければ、永遠に離脱できなくなります。⁽⁵⁹⁾

幽霊は家族がなおも骸骨を寺院に置き続けたいと言ふのを聞き、慌てて阮閔の夢に現れ、共に歸ることを求めた。

『春渚紀聞』卷第三雜記の「殯柩者役於伽藍」にも類似の記載がある。

私の嫂の馬氏のおじである承奉郎の馬察、字は彥明は錢塘出身の人であり、吏部の調選に赴くために上京する途中、

山陽に至った時に病氣で亡くなった。妻の實家は即ち山陽の李氏である。遺児はまだ十歳だったので、父の柩を先祖の墓地に歸葬できず、とりあえず城北の水陸寺に置いたが、それから十五年経ち、その母親である金華君が亡くなった後、ようやく改葬できた。息子がやってきて柩を移そうとすると、父親の幽霊が彼の夢に現れ、「私はこの寺に假埋葬されてから、伽藍神に役使されて、活路が得られなかった。今歸って埋葬されたら、神魂は自由になれて、轉生も期待できる」と言った。また、丹陽の方可大が以下のように話したことがある。建中靖國年間、當時の宰相の夫人が屋敷で亡くなったが、故郷に歸葬できずに、城外の普濟寺に暫く置かれた。彼女は突然その門人の夢に現れて、「私が毎日伽藍神に役使されて苦しんでいることを家族に伝えてほしい。速やかに歸葬されれば、それを免れることができる」と言った。門人は「夫人ともあるうお方がどうして役使されるのですか」と聞いた。夫人は「生前は國の賜封を受け、尊重されたけれど、死んでしまえば幽霊に過ぎない。ましてや佛界の地を遺骸で汚したのだから、大いに罰せられるのも當然で、しばらく役使されているだけだから、まだ幸いなほうだ」と答えた。この二つの出来事が似ているところから以下のことが分かる。佛寺に遺體を置くのは死者に鐘の音を聞かせてその回向の福への助けとするためなのだが、そのままにして葬期を失うことを考えなかった結果、明界においては魂をさまよわせ、幽界においては護神の役使に苦しませることになり、却って亡者を不安にさせることになった。これは戒めとしないといけない^⑥。

「阮郴州婦」の幽霊と同じく、この物語の中の幽霊も伽藍神に拘留されて轉生できなかった。文末の何遠のコメントからは、寺院に柩を寄置することにも積極的な意味があったことがわかるが、その一方で棺が放置されてしまえば、結局亡者を不安に陥れることになってしまうのである。

洪邁は物語を敘述するだけで、自分の意見を表明することはほとんどなく、「阮郴州婦」についても同じである。しかし、何遠は骸骨を寺院に置く風習に對して明らかに否定的な態度を取っている。こうした風習に批判的な者は他にもいた

とみてよいだろう。骸骨が長い間に寺院に置かれることは、幽霊に苦しみを與えるだけではなく、現實にも多くの問題を引き起こす。『萍洲可談』卷三には、元祐年間（一〇八六―九四）に某大臣が寺院に寄置された父親の棺を朱崖から迎えて、母親と合葬しようとする話がある。父の死後数十年経っていたために僧房にあった柩のどれが父親のものかわからず、やむを得ず一つの棺を持ち歸った。棺には款記もなく、寺院の管理もいい加減なものだったことが窺える。

更に、『清波雜志』卷十二にも、浙西の水郷の習俗として、僧寺では「小さな池を掘って少々の水を貯めて、朽ちた骸骨を浸す。男女の骸骨が混ざって見分けがつかない。たちまち骸骨で埋まり、これ以上入らなくなると、深夜に骸骨を取り出して、畚で運んで荒野に捨てると書かれている。著者の周輝もこのような悲惨な光景に明らかに批判的である。あの地域では風習にまであつていた。例えば漳州では、「漳州の風俗では親を埋葬しないのが当たり前であり、遺骸を往々にして僧刹に置く。危積は高く乾燥した土地に三つの義塚を營造して、期限を決めて埋葬させた。名前のわからない者、わかつていても葬る金がない者については、官府が埋葬した。大凡二千三百餘であり、石を刻んで記した。」⁽⁶²⁾という状況であつた。皇族の柩はほとんど寺院に置かれている。死者の埋葬が重視される一方で、こうした寺院への柩の寄置は社會問題となつていた。

骸骨を寺院に置く風習は幽霊が祟りをなすという説を推し廣めた。幽霊が祟るといふ説は、幽霊が埋葬を求めるといふ考え方を強める役割を果たしただろう。幽霊の埋骨への執念と寺院での祟りや埋骨しないことへの報い等に對する宋人の想像は、まさしくこの風習に對する批判を含んでいたと考えられる。解三娘が「死體を葬りたいという思いは、一時も忘れたことはございません」と言うように、幽霊は自分の骸骨の埋葬を望んでいるし、骸骨を埋葬しないと、幽霊は轉生の機會を迎えられないのである。

結び

解三娘の骸骨の埋葬に對する執念から出發した本稿の結論は以下の通りである。

第一に、幽霊と骸骨の間には非常に深い關係があるということである。幽霊にとって骸骨は大切な據り所である。幽霊は骸骨を失うと「孤魂野鬼」になる。幽霊と骸骨に深い繋がりがあるからこそ、幽霊は骸骨から遠く離れられないのである。様々な幽霊屋敷の話も、骸骨の周圍に幽霊が徘徊することから生まれたものである。また、幽霊が骸骨に付き従って移動することも、兩者の關係が密接なことを示している。ただ、全ての幽霊が受動的というわけではなく、骸骨を支配し、時には一體化して生者の姿になり、更には生き返ることもある。

第二に、幽霊が追求しているのは骸骨そのものの完全性だということである。これは、宋人の火葬觀念にも影響を及ぼした可能性がある。骸骨が散逸する場合に比べれば、火葬はただ骸骨の存在形態を變えたに過ぎない。そして、幽霊にとって、骸骨のなかでも特に頂骨が重要である。

第三に、宋人が骸骨の埋葬を重視しているということである。漏澤園の設立は政府の關心のありようを示していて、墓地選びにもそれが表れている。宋代には骸骨を埋葬せずに長期間寺院に置く風習も盛んだったが、一方で宋人はこの行爲に對して否定的な態度を示していた。幽霊が骸骨の埋葬を求める物語を通して、宋人は數多くの骸骨が適切に埋葬されなかった事實を訴えるほか、骸骨を寺院に置く行爲を批判したのである。

註

(1) 『列子』湯問篇「大禹行而見之、伯益知而名之、夷堅聞

而志之。」

(2) 『直齋書錄解題』卷十一「夷堅志」、甲至癸二百卷、支

甲至支癸一百卷。三甲至三癸一百卷、四甲四乙二十卷、大

凡四百二十卷」。

- (3) 齊藤茂・田淵欣也・福田知可志・安田真穂・山口博子譯『夷堅志』譯注 甲志上(二〇一四)・甲志下(二〇一五)・乙志上(二〇一七)・乙志下(二〇一八)。

(4) 「興州後軍統領趙豐、紹興二十七年春、以帥檄按兵諸郡、次果州、館于南充驛、命吏置榻中堂。驛人前白曰、『是堂有怪、夜必聞哭聲。常時賓客至此、多避不敢就、但舍于廳之西閣。』豐笑曰、『吾豈畏鬼者耶。』竟寢堂上。至夜、聞哭聲從外來、若有物直赴寢所。豐曰、『汝豈有冤欲言者乎。言之、吾爲汝直。否則亟去。』果去。頃之又來、羣從者皆聞履聲趾趾然。明日、以語太守王中孚弗、王以爲妄也。是夕、赴郡宴、夜歸方酒酣、未得寐、倚胡牀以憩。一女子散髮在前立曰、『妾乃解通判女三娘者也、名蓮奴。本中原人、遭亂入蜀、失身於秦司茶馬李恣戶部家、實居此館。李有女嫁郡守馬大夫之子紹京、以妾爲媵、不幸以姿貌見私於馬君。李氏告其父、杖妾至死、氣猶未絕、卽命掘大窰倒下妾屍瘞之。今三十年矣。幸將軍哀我、使得受生。』豐曰、『汝死許久。士大夫日日過此、何不早日直。』曰、『遺骸思葬、未嘗須臾忘。是間有神司守、不許數出。十年前、妾夜哭出訴、地神告曰、『後有趙將軍來此、是汝冤獲伸之時。』日夜望將軍至、故敢以請。』豐曰、『果如是、吾當念之。』女謝去。遣人隨視之、至堂外牆下、沒不見。明日、召僧爲誦佛書、作薦事、遂行。晚至潼川之東關縣、止縣驛。女子復在前、已束髮爲高髻。豐曰、『吾旣爲汝作佛事、何爲相逐。』曰、『將軍之賜固已大矣。但白骨尚在堂外牆下、非將軍誰爲出

之。』豐曰、『吾爲客、又已去彼、豈能爲汝出力。胡不訴于郡守王郎中。』曰、『非不知也。戟門有神明、詎容輒入。然妾之冤、非王郎中不能理、非將軍爲地、何以達於王郎中乎。妾骨不出、則妾不得生。使妾骨獲出而得生、在將軍一言宛轉間耳。』豐又許之、再具其事、走介白王守。王乃訪昔時李戶部所使從卒、獨有譚詠一人在、委詠訪其骨。詠率十數兵來牆下、發土求之、凡兩日、迷不得所在。詠致一巫母問之。巫自稱聖婆、口作鬼語、呼詠責曰、『汝當時手埋我、豈眞忘所在耶。今發土處卽是、但尙淺耳。當』倒下我、蓋以木床、木今尙在、若得木、骨卽隨之。頂骨在最下、千萬爲我必取。我不得頂骨不可生。』詠驚怖伏狀。又明日、果得屍。那爲徙葬于高原。時紹京爲渠州鄰水尉、未幾、就調普州推官、見解氏來說當日事、紹京繼踵亦卒。關壽卿者孫初赴教官、適館于此、嘗爲作記。虞并甫爲渠州守、紹京正作尉云。

(5) 一九八〇年代から、『夷堅志』をめぐる研究が活潑になった。例えば、王年雙「洪邁生平及其『夷堅志』研究」(國立政治大學碩士論文、一九八八年)、李劍國「『夷堅志』成書考——附論『洪邁現象』」(『天津師範大學學報(社會科學版)』一九九一年第三期)、「『夷堅志』佚文考」(『天津教育學院學報』一九九二年第二期)、張祝平「『夷堅志』材料來源及搜集方式考訂」(『南通師範學院學報(哲學社會科學版)』一九九九年第二期)、「論洪邁的小說觀」(『淮陰師範學院學報(哲學社會科學版)』二〇〇一年第五期)、凌郁之「洪邁著作系年考證」(『文獻』二〇〇〇年第二期)など。

『夷堅志』の内容をめぐる研究も増えた。例えば、劉黎明「『夷堅志』與南宋江南密宗信仰」（四川師範大學學報（社會科學版）二〇〇二年第三期）・『夷堅志』・建德妖鬼故事研究」（清華大學學報（哲學社會科學版）二〇〇三年第一期）、張文飛「洪邁『夷堅志』研究」（復旦大學博士論文、二〇〇八年）、王瑾「『夷堅志』新論——以故事類型和傳播爲中心」（暨南大學博士論文二〇一〇年）など。邱昌員「洪邁『夷堅志』綜論」（中國社會科學出版社、二〇一七年）は『夷堅志』について最新の著作である。日本でも、松本浩一・岡本不二明・大塚秀高・須江隆・福田知可志などが『夷堅志』に關聯する論文を公刊しており、伊原弘・靜永健編『南宋の隠れたベストセラー『夷堅志』の世界』（勉誠出版、二〇一五年）に近年の研究の成果が掲載されている。

(6) 宋代の喪葬についての研究はそれほど盛んではない。例えば朱瑞熙「宋代の喪葬習俗」（『學習月刊』一九九七年第二期）は、薄葬と火葬の流行を指摘し、佛教・道教とその他の迷信が喪葬に影響を與えたとする。張邦煒・張敏「兩宋火葬何以蔚然成風」（『四川師範大學學報（社會科學版）』一九九五年第二期）は、火葬流行の原因を探究し、その後の研究者に大きな影響を與えた。これに關しては後で論述する。總論としては、游彪「禮・『俗』之際——宋代喪葬禮俗以及特徵」（『雲南社會科學』二〇〇五年第一期）があり、「禮」（禮儀制度）と「俗」（社會習慣）の關係を論じ、宋人が墓地選びと埋葬の日取りを重視していた事實

と火葬の盛行も指摘した。その他、徐吉軍「中國殯葬史・宋代卷」（社會科學文獻出版社、二〇一七年）は宋代の喪葬の諸側面を紹介する。

(7) 「乃在邑日與一娼密暱、未幾娼死、王親詣瘞所、焚化其柩、而包燼骨著小函、箱中所貯蓋此也。」

(8) 「我□公家所營邸處土中人也、名曰小紅、居于西門。姊妹二人、吾父爲餅師。不幸後母無狀、虐遇我、我二人不能堪、皆自經死。今我重不幸、朽骨爲公隸人所壞、壙中物可直萬錢、劉老翁悉取之。我無所歸、今只在隍外胡桃樹下依公家以居、不可復去矣。」

(9) 「念幽冥間滯魄無所訴、集道士設九幽醮于縣治以拔度之。」

(10) 「每月夜、必見數百人出沒池上、或僧、或道士、或婦人、或商賈、歌呼雜選、良久、必哀歎乃止。」

(11) 「方離亂時、民逃匿無地、悉自經於茲室、此卽縊索也。風雨晦冥之夕、鬼哭不堪聽。」

(12) 「倒埋學旁」 「以手遍拍睡者、云此人及第、此人不及第。」

(13) 「秀州司錄廳多怪、常有者青巾布袍、形短而廣、行步遲重者。又有婦人、每夜輒出、惑打更吏卒者。先公居官時、伯兄丞相方九歲、白晝如有所見、張目瞪視、稱『水水』、移時方蘇。後兩日、公晚自郡歸、侍妾執公服在後、忽大呼仆地。」

(14) 「非蘇公改葬、當爲滯魄。」

(15) 「南安軍城東嘉祐寺、紹興初、有太守張朝議女、因其夫往嶺外不還、怏怏而夭、窆葬于方丈、遇夜卽出、人多見之（中略）紹興二十年、郡守都聖與潔率大庾令遷之於五里外

- 山間，今猶時出，與村落居人接。」
- (16) 「我朱家乳母也，不幸客死，今寄某坊某庵中，甚不便，願舅攜我歸。」
- (17) 「勞君愛念，孤魂寓此，豈不願有歸。然從君而南，得常常善視我，庶慰冥漠，君如更娶妻，不復我顧，則不若南之愈也。」「我在彼甚安，君強攜我。」
- (18) 「焚骨爲灰，南向颺之，庶幾遺魂得返中國也。」「我死，焚其骨送范陽佛寺，無使我爲虜地鬼也。」
- (19) 「命煮水數斗，取竈下灰一籃，喚妾前，以巾蒙其首，而注湯於灰上，煙氣勃勃然，妾卽仆地，蓋枯骨一具也。」
- (20) 「共臥一榻上，守視者稍怠，則兩骸已東西相背矣。」
- (21) 「但初出土時，役者不細謹，鉏妾脛骨欲斷，今不能行，不得已留此，非有他也。」
- (22) 「餘人盡去，我猶有兩臂在此，幸終惠我。」
- (23) 「古人之法，必犯大惡，則焚其屍。」
- (24) 前揭註(6) 論文。
- (25) 「自釋氏火化之說起，於是死而焚尸者，所在皆然。固有炎暑之際，畏其穢泄，斂不終日，肉未及寒而就熱者矣。」
- (26) 「衢人之俗，送死者皆火化於西溪沙洲上。」
- (27) 「其十五尸印火文于背，曰，山魃不道，天命誅之。其六尸印文稱，古埋伏尸，不著墳墓害及平人者，竿梟其首以徇。」
- (28) 「謂醫書所載，天靈蓋可入藥。」「我身首異處，不知幾年。因君出之，滿望度脫。不期欲入藥籠中，使我永無生望。且三魂七魄，久已分散，只一魂守此，又失頭顱。」
- (29) 「乃入破家中，戴髑髏而出。」
- (30) 「云狐能變美婦以媚人，然必假家間多年髑髏以戴於首而拜北斗，但髑髏不落，則化爲冠，而用事已則埋之，欲用則復以爲常。蓋不假此，則不能變也。人死骨朽，爲髑髏尚有靈。古方治勞疾用天靈蓋，既能治疾，豈不能爲妖邪。世有術者，事髑髏能知人已往事。」
- (31) 「及撤蓋板，則長女正疊足坐，縫男子頭巾，自腰以下，肉皆新生，膚理溫軟，腰以上猶是枯脂(中略) 所謂玄女之說，豈非道家所謂回骸起死，必得生人與久處，便可復活邪。」
- (32) 「七五姐不幸夭逝，於今七年，且又焚化了，此殆精魅假託，將必爲施郎不利，宜思其策。」「我在生時，盡讀父法書。又於夢中，蒙九宮玄女傳教吾返生還魂之法，遂得再爲人，永遠住浮世。」
- (33) 「公幸哀我，願丐水陸一會，以資受生。」
- (34) 「王承可鈇，紹興辛酉歲提舉浙東茶鹽，公廨在會稽子城東，蓋古龍興寺。承可第三子洵，嘗夢一丈夫，衣紫袍，來言曰，『我朽骨埋桃樹下，幽魂無所歸，君幸哀我，使得徙葬。』洵覺，白其父。視舍旁有巨桃一本，因下穿求骨，弗獲。明年八月晦，又夢有通謁者曰，『朝請大夫李尙仁。』
- (35) 「既沒之後，冥官錄其忠義殉國，俾之爲神。而朽骨猶埋後圃。願尙書哀我，收拾掩之，爲惠實大。」
- (36) 「吾之類無歸者，乃得富公與刺史聚之於此，使有安居。從是得生者大半矣。富公之德，以係仙籍焉。」「葬骨遷神，其在陰德無上於此。觀叢塚之下，幽魂感德懷賜，固可知矣。」

惟大人君子能爲此善事」。

- (37) 『宋史』卷三百一十三列傳第七十二、「東都事略」卷六十八列傳五十一、范純仁「富鄭公行狀」〔范忠宣公文集〕卷十七、蘇軾「富鄭公神道碑銘」〔宋文鑑〕卷百四十七。
- (38) 「蓋其惻隱之心類如是也」。
- (39) 「或謂停父母之喪久而不葬者、則其子孫每歲縮小」。
- (40) 「惟父母久不葬之故耳」。
- (41) 「子父死不葬、科名未可期也」。
- (42) 「士人父母未葬者、不許入學」。
- (43) 漏澤園の研究は多いが、ここでは考古學からのものを舉げておく。早くには、張助燎「從漏澤園看所謂『太平盛世』——考古發現的漏澤園遺跡和宋代的漏澤園制度」〔四川大學學報〕一九七五年第四期)があり、近年では張新宇「試論宋代漏澤園公墓制度的形成原因和淵源」〔四川大學學報〕二〇〇八年第五期)がある。
- (44) 『卻掃編』卷下。
- (45) 『宋史』卷一百七十八志第一百三十一食貨上六。
- (46) 『建炎以來繫年要錄』卷一百五十二。
- (47) 『夷堅志』支庚卷第九「陳道遙」。
- (48) 張新宇前掲論文は、漏澤園が設立された目的のうち、戦死した兵士の遺骸の埋葬が重要であったとする。この見解は同論文に挙げられている墓誌によつて裏付けられる。發掘された墓誌は兵士のものが多く、たとえば陝州の漏澤園で見つかった二三八點中、その身分が分かるものは一七五點あるが、兵士のものが二二〇點ある。洛陽の漏澤園の墓誌もほとんど兵士のものである。)
- (49) 『咸淳臨安志』卷八十八恤民祥異。
- (50) 「死者人所不免、唯窮民無所歸、則擇空隙地爲漏澤園、無以殮、則與之棺、使得葬埋、春秋享祀、恩及泉壤」。
- (51) 「比之六賊、獨免誅戮、或謂以其當軸時、建居養・安濟・漏澤、貧有養、病有醫、死有葬、陰德及物所致」。
- (52) 「有貪求吉地未能愜意、至十數年不葬其親者。有既葬以爲不吉、一掘未已、至掘三掘四者。有因買地致訟、棺未入土、而家已蕭條者。有兄弟數人、惑於各房風水之說、至於骨肉化爲仇讎者」。
- (53) 『溫國文正公集』卷第七十一「今人葬不厚於古、而拘於陰陽禁忌則甚焉。(中略)非此地非此時不可葬也、舉世惑而信之」。
- (54) 「宋文安公白、開封人、葬于鄭州再世矣。方士過其處、指墓側澗水曰、『此在五行書極佳、它日當出天子。』宋氏聞之懼、命役徒悉力閉塞之、遂爲平陸。自是宦緒不進、亦不復有人登科。崇寧初、大水汎溢、衝澗成小渠、僅闊尺許。明年、曾孫渙擢第、距文安之沒正百年。又六年、兄渠繼之。然渙仕財至郡守、渠得博士以沒、其後終不顯。渠與子婦翁、同門壻也」。
- (55) 「葬者、家之大事、奈何不詢陰陽、此必不可」。
- (56) 「主此木三百八十年、當與黃察院作椁、安得便伐」。
- (57) 『禮記』王制「天子七日而殯、七月而葬。諸侯五日而殯、五月而葬。大夫・士・庶人、三日而殯、三月而葬」。
- (58) 吳敬「試論宋代的葬期」〔華夏考古〕、二〇一二年第一

期)。

(59) 「妾寄殯寺中、是爲客鬼、爲伽藍神所拘。雖時得一還家、每晨昏鐘鳴必奔往聽命、極爲悲苦。今不獲同歸、則永無脫理」。

(60) 「余馬嫂之季父承奉郎察字彥明、錢塘人、赴調至山陽感時疾而終。婦家卽山陽李氏也。遺孤始十歲、未克扶護歸附先隴、因權厝城北水陸寺凡十五年。其母金華君終、始獲從葬。其子初至啟殯、致夢其子曰、『我自旅殯此寺、卽爲伽藍神拘役、至今未得生路、今獲歸掩眞宅、始神魄自如、而轉生有期矣。』又丹陽方可大言、建中靖國間、有時相夫人終于相府、未獲護葬還里、權厝城外普濟寺、忽見夢於其門人、云、『爲語我家、我日夕苦於伽藍神之役、得速歸瘞、則免此矣。』門人請曰、『夫人而見役何也。』夫人曰、『我生

享國封、不爲不尊、而死亦鬼耳。況以遺骸滓穢佛界之地、得不大譴罪、而姑役使之、亦幸矣。』二事適相類者、則知精廬所在、在人則以爲託之閭寂、聞鐘梵之聲、可資亡者依向之福、必不慮因循失葬、明則致羈魂之尤、幽則苦護神之役、反俾亡者不安、不得不爲戒也」。

(61) 「鑿方尺之池、積滲蹄之水、以浸枯骨。男女骸骨、殺雜無辨。旋即填塞不能容、深夜乃取出、畚貯散棄荒野外」。

(62) 『宋史』卷四百一十五列傳第一百七十四「漳俗視不葬親爲常、往往棲寄僧刹、殮命營高燥地爲義塚三、約期責之葬、其無主名、若有主名而力弗給者、官爲葬之、凡二千三百有奇、刻石以識」。

**“CORPSES WANT TO BE BURIED” :
TALES ON BURYING REMAINS IN THE *YIJIANZHI***

ZHENG Gan

Hong Mai 洪邁, courtesy name Jinglu 景廬, art names Yechu 野處 and Rongzhai 容齋, posthumous name Wenmin 文敏, was born in Poyang 鄱陽, and served during the reigns of four emperors of the Southern Song dynasty : Gaozong (r. 1127-1162), Xiaozong (r. 1162-1189), Guangzong (r. 1189-1194), and Ningzong (r. 1194-1224). His work *Yijianzhi* 夷堅志 is the most voluminous individual anthology of strange tales in China. A story titled “Xie Sanniang” 解三娘 in volume seventeen of the first section of *Yijianzhi* is about the ghost of a woman named Xie Sanniang who had wandered around her own corpse for thirty years, and was finally able to be reincarnated because of a man named Zhao Feng 趙豐. While the story is very rich in content and contains many issues worthy of discussion, this paper focuses on the burial of the corpse. Cruelly killed and having become a ghost, Xie Sanniang sought only that her own body would be properly buried, which was a precondition for reincarnation.

Two questions can be considered here. First, what does the corpse mean for a ghost? The ghost of Xie Sanniang wandering around her own corpse suggests that ghosts are tied to their corpses. Second, what is the meaning of burial? Xie Sanniang asked to be buried properly, only after which her ghost could be reincarnated.

This paper draws the following conclusions. First, there is a very deep connection between ghosts and their corpses. Ghosts are dependent on their corpses so they cannot travel far from them. The various stories of haunted houses also derive from the fact that ghosts wander near their corpses. The phenomenon of ghosts following after their corpses shows the close relationship between them as well. Second, what ghosts seek is the integrity of their bodies. Third, people during the Song era attached great importance to the burial of corpses, which is suggested by the establishment of Louzeyuan 漏澤園, and the obsession of people with the choice of burial sites. Through the stories of ghosts demanding interment of their bodies, the people in the Song era revealed the fact that many corpses were not properly buried, and criticized the act of placing corpses in temples.